とうほく彩発見

中嶋 嶺雄さん（国際教養大学学長 国際社会学者）

秋田の地と人

内外に十分知られず

昨日、東京のある大学で、中国問題をテーマに私が話す懇談会があった。席を改めて出席者と会食したのだが、話題がおのずと新設の国際教養大学のことになり、やがて秋田県のことに発展した。そのなかにかなり秋田を知っている年配の科学者がいて、最近も秋田駒ケ岳に行き、鳥海山にも登ったという。その方が言うには、秋田の人はおとなしいがよく団結する、かつて部下に秋田出身者を用いたところ、次々に秋田県人を採用することになってしまったといわれた。

この科学者の言葉を置き換えれば、秋田県人には団結力があり、同時にネポティズム（縁故主義）が強いということになろう。こうした見方が正しいとすれば、秋田県人のまとまりの根源にあるのは、明らかに外部の人を差異化する秋田弁という個性的な言語空間への集団的な帰属感ではないかとも思われる。

もっとも、これはいわば「県民性」論なので議論百出、よほど客観的なデータで裏付けられない限り、あまり信用できないような気もする。私はこの春から初めて秋田に住むことになったので、まだ秋田県人の性格を論じる資格などあろうはずがない。だが、秋田県の人々は明確な県人意識（アイデンティティー）をもって団結しているのかというと、私の印象では、必ずしもそうではないように思う。それは、秋田県の成り立ちの歴史にある程度は由来しているのかもしれない。こちらに来て「秋田県は昔はなんと言う国なのですか」と、秋田の人に質問してみると、意外に答えが不明確な場合が多い。「それは出羽の国です」とばかりは言えず、出羽は山形県にもかかっていたり、県北の鹿角一帯は旧南部藩に属し、陸奥の国であったことなどにもよるからであろう。

この点では、私の郷里である長野県と似ているように思う。私自身は松本市生まれなので、現在の田中康夫知事ならずとも、長野県と書くことには抵抗があり、しばしば信州と書く。松本は以前は筑摩県の県庁所在地であり、信州の国府としての城下町でもあったが、長野県には現在でも南信、北信（場合によっては中信、東信）という意識が強い。よく信州人は団結するといわれるが、実際はその逆で、だからこそ県民意識をかき立てる有名な「信濃の国」という県歌があるのだともいえよう。「信濃の国は、十州に境つらぬる国にして、聳ゆる山はいや高く、流るる川はいや遠し、――」で始まるこの歌を合唱すると、長野県の人はいや応なく信州人としてジーンとくるのだが、長野オリンピックのときの松本や諏訪、飯田、伊那などの中南信地方の人々の反応にも見られたように、全県が一致団結というのではない。

秋田の人々は、長野県人のように理屈ばかり並べて、他方では人の足を引っ張るというようなことはないようであり、それだけにいささかシャイで自己PRがあまり上手ではないような気がする。白神山地や田沢湖などの自然はもとより、角館のような日本のどこにもない小古都、それに秋田の竿灯（かんとう）や西馬音内の盆踊り、はたまた世界屈指の平野政吉美術館など、日本を代表する地域文化を有しているのに、国内的にも国際的にもまだ十分知られていないようなのは残念である。

なかじま・みねお　1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院修了、社会学博士。95～01年東京外国語大学長。カリフォルニア大学客員教授などを歴任。現在、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）。著書に「北京烈烈」（サントリー学芸賞）、「国際関係論」など。03年度「正論大賞」受賞。